



August 28, 1982. The last of Palestinian soldiers pulls out of Beirut under the protection of multinational forces. During the Lebanon War of 1982, Yasser Arafat, PLO forces, and Syrian...

THE 1982 ISRAEL INVASION TO LEBANON /SO CALL " OPERATION PEACE FOR THE GALILEE"

2020年9月3日校正

第7章 PLO破壊ーイスラエル軍のベイルート占領

1 カーター政権からレーガン政権へ

1979年にイスラエル・エジプトが平和条約を結び、シナイ半島をエジプトに返還するとパレスチナ問題は放置状態のまま、1980年1月エジプト・イスラエルが正式に国交を樹立した。こうした「キャンプデービッド体制」を強化する動きに対してアラブ世界にとってさらに不利な動きが続いた。79年9月、アパルトヘイトの南アフリカとイスラエルによる核兵器共同開発が進み、9月には南アフリカ沖で最初の核実験を行った。



Shimon Peres (left) and Abba Eban vote in favor of the Basic Law Jerusalem on July 30, 1980 the Ninth Knesset

Basic Law: Jerusalem, Capital of Israel (Knesset)

イスラエルはエジプトとの平和条約で南部戦線の安定を確保したとして、1980年7月クネセトで「エルサレム基本法」を採択し、占領した東エルサレムを含む「エルサレム恒久首都宣言」を発し、西岸地区、特に占領したエルサレムへの入植地の拡大でエルサレムのユダヤ化を開始した。



President Saddam Hussein of Iraq in 1980/Saddam Hussein

一方イラン革命以降イラクでは、シーア派イラク人のイランと同調した動きを恐れたバース党政権は、バクル大統領から実権派のサダム・フセインが正式に大統領に就任するとイランに対する国境地帯での攻撃を拡大した。そしてついに80年9月にはイラク空軍によるイラン爆撃によってイラン・イラク戦争が始まった。81年に入ると選挙を控えたメナヘム・ベギン首相は、81年6月7日「バビロン作戦」と銘打ってイラクのバグダッド近郊のオシラクにあるイラクの原子炉を空爆し破壊した。これは6月30日の総選挙でベギンに有利に作用し8月、第二次ベギン内閣を成立させた。アリエル・シャロンが国防相に就いた。



An 1981 Israeli Black Panthers protest poster/Menachem Begin

この81年第二次ベギン内閣は、キャンプデービッド合意の「中東和平の枠組」のパレスチナ自治とは、イスラエルの西岸地区全土のイスラエルの主権のもとに作られることを明確に表明した。「エレッツ・イスラエルの西は全て我々の支配下に入った。分割されることはもう二度とないだろう。この領土を外国の法のもとに外国の支配者に譲り渡すことはもう絶対許さない」とベギンはジャボチンスキーの墓前で宣言した。(注1)

そして又81年に入ると、レバノンのパレスチナ難民キャンプや施設に対するイスラエル軍の攻撃が激しくなった。こうしたベギン政権の強硬な動きは、81年1月から権力を握った米国共和党ロナルド・レーガンの登場によって支えられていた。カーター政権下で和平交渉の妥協を強いられてきたベギン政権は、反共反ソ戦略を第一とするレーガン政権の重要なパートナーとなり、かつてのキッシンジャー言うところの「イスラエルは米国の戦略的資産」論が再び息を吹き返した。



Alexander Haig/United States Secretary of State

イスラエルと平和条約を結んだエジプトのサダト大統領が、10月の戦勝記念日の81年10月6日閱兵式で、自らの将兵に銃殺された一方で、11月30日、米レーガン大統領とイスラエル・ベギン首相は、ワシントンにおいて「戦略的協力合意」の覚書に調印した。ソ連を敵国とした両国による再軍備・諜報などの戦略同盟とは、中東におけるイスラエルの軍備拡大、軍事行動への合意に他ならない。新国務長官アレクサンダー・ヘイグは、反ソ反共の軍人としてよく知られていた。こうした新しい同盟に支えられて、ベギン政権は12月には、シリア領ゴラン高原併合を閣議決定し、クネセトでも67年以来占領してきたゴラン高原併合を決議した。この81年の第2次ベギン内閣はレーガン政権から、フリーハンドを得たわけである。

米大統領がカーターからレーガンに代わると、反共勢力の軍事反攻を象徴するように、世界の攻防の質が変わっていくことになる。カーター政権は「人権外交」を旨として、ラテンアメリカ軍事政権による拷問や人権抑圧を批判したが、レーガン政権になった後には、「反共の同盟」を第一とし

人権侵害の政権はお咎めなしばかりか、米国政権自身が各地の米大使館を拠点に、暴力、拉致、拷問の教育訓練にまで便宜を図るようになった。

すでに79年12月24日、ソ連がアフガニスタンに侵略し、ソ連の地政学的戦略に基づいたアフガンの一時的勝利は、国際政治の攻防を反転させる予兆をなしていた。グローバルに俯瞰すれば、このソ連によるアフガニスタン侵攻、駐留は反共反ソ勢力を勢いづかせ、80年代以降の反帝勢力の敗北の出発点をなしている。



US president Ronald Reagan, left, and Israeli prime minister Menachem Begin, 1981.

レーガン政権は、反共反ソ戦略に加えて、Low intensive conflict (LIC) または Low intensive war (LIW) 戦略をもって、革命・解放勢力への圧殺を図っていく。これは当時世界各地で闘っていた、革命、解放の過渡にある反帝勢力に対する、「非対称戦争」の戦略で「低烈度戦争」と訳された。低烈度戦争の基本は、まず人民勢力の正義性を奪い、潜入攪乱し財力を駆使しつつ、人民と革命勢力を引き離し解体させようとする戦略である。米国政府は、この時から「武装勢力」や「革命勢力」というこれまでの呼称を「テロ組織」「テロリスト」と変えるよう国際的に要求するメディア戦略を採用した。何万回も言えば浸透するという考えであった。ことに中東ではこのLIW戦略は、社会主義諸国や民族主義政権と結びつくことによって、他の解放勢力には持ち得ない兵站力や財力、解放区、訓練所から情報まで持つ、PLOを中心とするパレスチナ勢力に対する破壊が目指された。それはベギン政権と利害の一致するところであった。



Democratic Republic of Afghanistan/ People's Democratic Party of Afghanistan/1979 ~1989 Soviet-Afghan War

アフガニスタンへのソ連の侵攻ばかりか、これまでの社会主義政権の官僚的で腐敗した縁故主義のトップダウンシステムは、人民の革命の成果を収奪し尽くして制度疲労を起こしており、人民の支持、支援も変化していた。資本主義の消費水準が華々しく広がるにつれて、規制と不自由な社会の変革が求められた。国家は党の保守勢力が握り、人民に敵対していた。「真実」の押し付けや、情報管理を常態化させ、多くの反体制勢力の批判を受け止めず、「反革命」として逮捕追放してきた。こうした社会主義諸国の政権の側の失策は、レーガンの登場によって深刻化していく。



1980 Independently managed labor union "Solidarity"

1989 The Polish Third Republic

80年にはポーランドの「連帯」の活動も広まった。「連帯」は政府を支え、共同するこれまでの社会主義国の労働組合ではない。政府から自立し、政府の政策に反対し全国的ストライキを行った。政府に弾圧され非合法化されながらも「連帯」は後に復権し、東欧人民革命を牽引するシンボルとなる。この「連帯」の闘いから、これまで革命と解放勢力の特許のようなデモ

や大衆動員の闘い方が、社会主義諸国でも生まれてきた。レーガン政権の登場は中東ばかりかグローバルな反共戦略の煽動を財政、兵站を駆使し、強力に親米勢力を支援育成した。世界が変わり始めた。

2 第15回パレスチナ民族評議会（PNC）

パレスチナ側はキャンプデービッド合意（CD合意）に反対し、その合意の一つである「中東和平の枠組」がヨルダン川西岸領土のイスラエルの主権のもとでの住民の自治でしかないことを糾弾した。又PLOをテロ組織として排除することに対抗して、被占領地のナブルスやヘブロンなどの市町村長らが、「PLOはパレスチナ人民の唯一の代表」と決議してベギンの「自治構想」に対決してきた。

European Economic Community (ECC) / Belgium / France / West Germany / Italy / Luxembourg / Kingdom of the Netherlands / Denmark / Republic of Ireland / United Kingdom / Greece / Portugal / Spain
80年6月には、EC（欧州共同体）首脳会議は、パレスチナ人の自決の権利を認める声明を発表した。また国連パレスチナ問題緊急会議では、「全占領地からのイスラエルの無条件撤退要求」を決議し、ベギンの宣言に反対してきた。第二インターナショナルの流れを汲む欧州社民政権は、「PLOがイスラエルを承認しイスラエルがPLOを承認すべきだ」と、PLOの国際的認知と引き換えにイスラエル承認を求めている。



JAPAN-PALESTINE PARLIAMENTARIANS LEAGUE FOR FRIENDSHIP

Yoshiko Yamaguchi/P.L.O. magazin フィラスティンビラーディ NO17

日本もまた、欧州同様の立場にあった。日本では77年のPLO東京事務所設置以降、79年6月には、日本・パレスチナ友好議員連盟が発足した。自民党の山口淑子、木村俊雄、宇都宮徳馬らの「ハト派」や社会党委員長飛鳥田一雄らであった。



PLO Chairman Yasser Arafat visits Japan

P.L.O. magazine フィラスティンビラーディ NO24

民間交流も活発化し、79年11月には飛鳥田委員長がバイルートを訪れ、パレスチナ友好議員連盟も、12月バイルートでアラファト議長と会見するなどアラファト議長訪日に向けて、具体的に動き出した。私たち日本人もその実現を惜しまなかったし、日本の政治の実情や社会の特徴などを、PLOやファタハにレクチャーしたり協力した。そして81年10月14日、PLOアラファト議長は初めて日本を訪問している。



The 15th Palestinian National Council 1981

1981年4月、ダマスカスで第15回パレスチナ民族評議会(PNC)が開催された。このPNCでPLOを唯一のパレスチナ人の代表として、国際社会に訴え認知させることと同時に、ソ連ブレジネフ書記長の提案する、PLO参加の中東和平会議案支持を確認した。そして、被占領地の武装闘争を含む、あらゆる抵抗運動の強化拡大を決議した。「CD合意」承認や、イスラエルの投降路線を拒否し、アラブレベルではエジプトと復交したソマリア、オマーン、スーダンを非難した。またヨルダンが米国と呼応して、再びPLO抜きでパレスチナ自治の問題に介入しないよう警告し、PLOを唯一の代表と認めることを求めた。そして反シオニズムを貫く「不屈の対決戦線」国家(シリア、リビア、アルジェリア、イエメン)や、レバノン民族主義勢力との団結の強化を確認した。又ヨルダンを含む全アラブ領土からの、対イスラエルゲリラ攻撃ができるよう、アラブ諸国に協力を求めるとした。全体として「CD合意」の実態が明らかになり、パレスチナ西岸地区併合が語られていることも反映して、対決色の強い決議が採択された。

この81年PNC第15回大会で、7年ぶりにPFLPはPLO執行委員会に返り咲いた。この復帰は、PFLPの70年代を総括した81年第4回大会に基づくものであった。これまでのパレスチナ革命の段階規定の誤ちを認めた。アラブ革命の展望と条件の悪化の中で、全土解放の漸次的解放戦術を採用し、全土解放にミニパレスチナ国家反対を対置するのではなく、ミニ国家を全土解放の一段階として認め、その実現のためにPLO執行部に復帰して、政治路線の実現を目指す方針へと転換したためである。



PFLPは、ベトナムともカンボジアや中国の党とも友好的な関係にあった。そのため、カンボジアポルポト政権の「一挙的な革命」の恣意的なあり方を批判し、敗北を教訓としていた。又、社会主義国同士の、中国・ベトナムの軍事対立も批判的に捉え、私たちともそれらのアジア社会主義のあり方を討議したりしてきた。そしてパレスチナ解放と社会変革を戦略的に前進させるために、PLOの内側から民主的変革を求める方向の教訓となっていくと思う。この時点から、PFLPは戦術の急進性よりも戦略実現に向けた戦術の柔軟性と政治的にはPLOの戦略的重要性を、これまで以上に考えて政治、政策実現を重視していくと思う。それは後のPLOの分裂の中で、アラファトを批判しつつ、また彼を助けることにもなっていく。PLOアラファト路線について言えば、ファタハ内で「黒い九月」を配下に左派路線を取り、社会主義諸国と保安共同情報、諜報共同を強化するアブ・イヤードと、PLO内の親ヨルダン派との協力や被占領下の闘いを重視するアブ・ジハードの間では、矛盾が大きくなっていた。

3 第二次ベギン内閣の危険な動き

レーガン政権と第二次ベギン内閣が成立すると、戦略同盟のもと両者の合意によるレバノン侵略計画、PLO追放がありうることは予測されていた。すでに81年からイスラエルの空爆、シリア軍(レバノン駐留)との一触即発、PLOとの戦争が始まっていた。7月にはイスラエル軍は難民キャンプや、PLO勢力が拠点とするアラブ大学周辺まで爆撃し、数百人の死者1,000人以上の負傷者をだし、レバノン住民らの被害も甚大であった。



Philip Charles Habib/special envoy to the Middle East

この攻撃はレーガンの特使であるレバノン系米国人フィリップ・ハビブの仲介で、イスラエル・PLOの間の停戦が成立した。PLOが、イスラエルとの間で停戦当事者となったのは初めてであったが、それほどレバノンでのパレスチナ勢力の力が増し、レバノン内戦下、政府機能が弱かったためである。右派も破壊活動を繰り返した。私たちの居住エリアはハクハニ地区、サブラ地区のPLO傘下の解放組織の混在しているところにあり、81年10月にはアパートの真下に仕掛けられた車爆弾によって、数百人の死傷者が出ている。この時はアパートの全体が破壊されたが、運よく私たちの中に死傷者が出なかった。こうした中、PLO傘下のパレスチナ勢力は、反帝反シオニズムのもと、各地の革命、解放勢力と結び、レーガンの挑発的な反共戦略・LIW戦争に対決する力を育てていた。PLOを通して、それらの兵站・情報・軍事訓練など、ソ連東欧とも結びついていた。特にレバノンベイルートから南部は解放区であり、国際革命根拠地のように、アジア、アラブ、アフリカ、米欧、ラテンアメリカの闘う人々が集い、軍事的、政治的に共同し交流した。



Bachir Gemayel/Lebanese Forces (LF)/Lebanese Phalange Party

キリスト教右派民兵内部の、イスラエル同盟派のバシール・ジャマイエルに対立した、ダニー・シャムーン一派が助けを求めたのもPLO保安局であったところに、その力の大きさが示されていた。こうした増大するPLO勢力の破壊と、キリスト教右派をレバノンの政権に就かせることは、レーガンやベギンの不可欠の野望である。



Ariel Sharon/Minister of Defense

第二次ベギン内閣の国防大臣となったアリエル・シャロンはすぐに、「レバノン侵略計画」に着手した。シャロン計画の第一はPLOの軍事力破壊、レバノンからPLO追放、第二にはバシール・ジャマイエルの指揮するレバニーズフォース(LF)を政権につけて、イスラエルと平和条約を調印させる。そして第三にシリア軍をレバノンから追放するという計画で、シャロンの目論見ではそれが中東全体を変化させ、西岸地区を併合しヨルダンにパレスチナ難民らの受け皿にさせるというものである。

1982年1月シャロンはベギンの合意のもとに極秘に東ベイルートを訪れた。そこでバシール・ジャマイエルに会い、戦争になった場合にはベイルートを占領することも話し合われた。2月16日にはバシール・ジャマイエルが極秘裏にイスラエルに行って、シャロン・ベギンと会議した。ベギン

はこの会談で、もし「テロリスト」(パレスチナ勢力のこと)の活動が続けばレバノンに侵攻し、そしてそうなればイスラエルはできるだけ深く北部に進軍すると確約した。(注2)



Rafael Eitan/Chief of the General Staff (Israel)

ここで、バシール・ジャマイエルの大統領選出馬も当然話されただろう。その後シャロンはどうやって上手くパレスチナ側を挑発し、戦争を起こすか、ラファエル・エイタン参謀長と練り、2月から3月にはエイタンがレバノンのキリスト教徒右派(ファランジスト)支配地域を視察して、翌日には部下の将校らをレバノンに送り、詳細な作戦協力を行ったとみられる。(注3)

シャロンは、あれこれの挑発作戦、例えばちょうどシナイ半島からイスラエル軍が撤退するのでエジプトが平和条約で手が出せないうちに、レバノンに攻撃するなどPLOとの停戦協定を利用してPLO側の動きがあればとレバノン侵略に向け手ぐすねを引いていたところである。



Shlomo Argov/ the Israeli ambassador to the United Kingdom

6月3日、シャロンやベギンを喜ばせる侵略理由が起きた。ロンドンのホテルの玄関で駐英イスラエル大使のシュロモ・アルゴウが、パレスチナ勢力、アブ・ニダール派の者によって銃撃され重傷を負った。アブ・ニダール派としてはPLOとイスラエルの停戦破棄を企てたのだろう。イスラエルでは、シンベト(イスラエル国内の防諜と内部安全機関・イスラエル総保安庁)の長官が、「攻撃したのはPLOアラファトと対立するアブ・ニダール指揮下の組織である公算が強い」と言おうとすると、ラファエル・エイタンは「アブ・ニダールだろうがアブ何だろうが、敵はPLOだ」と説明をはねつけた。(注4)

待っていたレバノン侵略の口実ができたばかり、ベギンの合意のもとシャロン国防相とエイタン参謀長は、計画通りに進めた。アヴィ・シュライムによれば、エイタンはベイルートのPLO本部をイスラエル軍が空爆したら、自動的にイスラエル入植地に砲撃せよという指令がパレスチナ砲撃隊に出ていることを知っていた。(注5)それをわざと知っていて、ベイルートのPLO本部施設を空爆したことで、予想通りのガリラヤ地方入植地への砲撃を受けた。ベギン政権としては、米国にもイスラエル国民にも戦争拡大の口実が整ったという訳である。

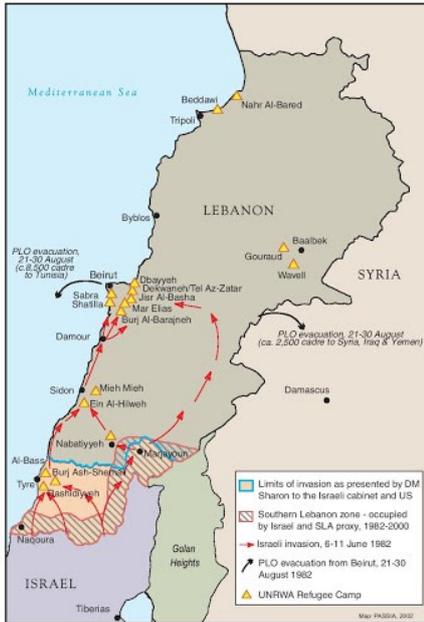
4 イスラエル軍レバノン侵略



An Israeli bombardment of a PLO position on the Lebanese coast

1982年6月4日激しい空爆が昼寝時を狙って始まった。私や仲間たちは、ちょうどPFLPと共にリッダ闘争10周年パーティーを終え、南部戦場に戻ったり他のアラブの国へ移動し始める者もいた。リッダ闘争の戦士たちの「葬式ではなく祭を！」という遺言で、5月30日はパレスチナ、アラブの友人たちを招いてPFLPと共に祭のように過ごすのが習わしと

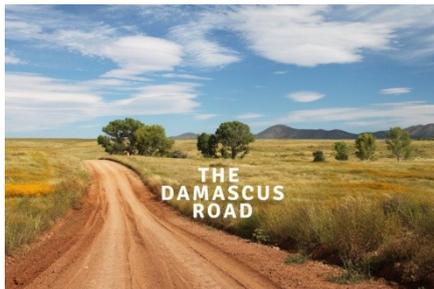
なって久しい。



Israel – Invasion Galilee Peace Operations

その記念パーティーの後に、毎年一年間の共同の総括や新計画を立てるために、私も含めて討議を続けていた時であった。翌日も間断ない本格的空爆に加えて、6月6日からイスラエルのレバノン侵略が始まった。イスラエルは「ガリラヤに平和を」作戦と称した。私たちがPLO、ファタハ、PFLPと話し合ったが、彼らパレスチナ側は「北上するイスラエル軍をいったん撤退してやり過ごして対峙し反撃する」という、ゲリラ戦法にこだわっていた。この戦術はイスラエルがやり過ごすレベルで、侵略を止めればの話である。ベイルート包囲は、これまで分析し予測しながら皆まだ半信半疑であった。ラジオでは既に、イスラエル軍は、シリア国境に向かうダマスカス街道と呼ばれる幹線道路に向かっており、ドルーズ族の山岳地帯を抵抗もなく突き進

んでいると伝えている。このダマスカス街道がイスラエルに分断されると、ベイルートは包囲され、シリアやベカー方面に抜けることはできない。6月8日、国連安保理の停戦案に対して、レバノン、PLOは受諾の意向を示したが、イスラエルは拒否して北上しベイルート包囲を目指した。



6日のイスラエル軍侵略当初は、パレスチナテロリストの掃討でありシリア軍と交戦する意図はない、と表明していたベギン政権は北上を急いだ。ダマスカス街道に砲弾が届くところに来て、ベギン首相は8日夕方新たな「四条件」を宣言した。PLOとシリア軍のレバノンからの全面撤退を要求し、レバノンに強力な中央政府を作り、レバノンとイスラエルの間に講和を求める

といった内容である。6月9日国連安保理事会のイスラエルのレバノン侵略非難決議は、レーガン政権の拒否権行使によって葬られた。

すでに同日、ベカー高原では、ダマスカス街道シリア国境へと抜ける戦略道路をめぐる、シリア軍とイスラエル軍が交戦し始めた。シリア空軍戦闘機とイスラエルの戦闘機のドッグファイトに至り、イスラエル軍は100機を超える戦闘機でシリア機20機近くを撃墜し、シリアのミサイル基地19箇所を破壊したという。シリア側も、同数のイスラエル戦闘機のミサイル攻撃による撃墜を発表した。シリア軍は空中戦を果敢に闘ったが、イスラエル側の戦闘機の量と質は、米軍のAWACS(空中早期警戒機)の支援を受けて優位に立ち、シリアは制空権を奪われた。イスラエル軍は、各地でクラスター爆弾バンカーバスターなどの残虐兵器を次々と投入した。

当時サウジアラビアにいたPLOアラファト議長は、危険を冒してベイルートへと急ぎ戻った。ベイルート、ダマスカス道路の攻防が激しく続き、戦車戦、空爆によってイスラエル軍が制圧する見通しがついたところで、6月11日米国停戦提案にイスラエルが同意して発効した。イスラエルにとっては、陣形立て直しのための停戦である。イスラエル軍は、海岸沿い山岳地帯など三方面から北上しており、ベイルート包囲に向けて体制を整える必要があった。

イスラエルが停戦を受け入れたのは、すでに海岸部を北上した部隊も、ベイルート南部まで到達していたからである。シャロン国防相は停戦が発効した6月11日夜、ファランヘ党のLFらの支配するレバノンのジュニエ港に飛んで、バシール・ジャマイエルと会った。(注6)

ここでシャロンはバシールらLFに、西ベイルートに封じ込めるPLOを攻めたててもらおう思惑であった。しかしバシール・ジャマイエルは上機嫌であったが、PLOを敵に回して積極的な役割を果たす気がないのが分かった。当然だろう。レバノン大統領になる身としては、イスラエルの下請けの姿をこうした状況下で晒すことはできない。シャロンは、もちろん単独でも戦争をやめる考えはない。「停戦」と言いつつ攻撃を繰り返し、6月13日にはベイルート包囲が完成したのである。

5 レバノン南部戦場の闘い



当時の在レバノンの軍事力について言えば、イスラエルの78年南部占領以来、国連軍 (UNIFIL) 7,000人が監視軍として南部国境地帯に駐留し、レバノン首都北部シリアにいたる地域は、シリア軍3万人が駐留していた。ベイルート以南の南部には総勢15,000人のパレスチナ武装勢力、さらにレバノン内戦を闘うレバノン民族主義勢力の民兵 (レバノン共産党、ドルーズ、イスラームシーア派、スンニー派、ナセル主義、民族主義、住民地域単位の武装グループなど多くのグループに分かれている) が1万人以上いる。



Saad Haddad/South Lebanese Army

ファランジストの右派LFの軍団は、ベイルート東から北部に2万5,000人の民兵がおり重火器、戦車、戦闘機を持つと言われていた。南部イスラエル傀儡のサード・ハダードの南レバノン軍3,000人、北部にキリスト教マロン派のフランジーエ元大統領率いる親シリア勢力も数千人。加えて25,000人のレバノン正規軍がいた。人口は当時は380万人で40の民兵組織があると言われ、レバノン正規軍は、西ベイルートではシリア軍とパレスチナ勢力の間で力を持っていなかった。

このようにイスラエルと南に対峙しつつ、レバノン内戦下では武装が日常生活であることを示している。どこに行ってもどこかの検問に会うのが解放区の日常であり、私たちにとってはごく自然な環境になっていた。そこにイスラエルの侵略戦争が始まり、空爆、艦砲射撃、戦車、歩兵による侵略、ベイルート占領包囲が始まったのである。



OPERATION PEACE FOR THE GALILEE

Israeli troops in South Lebanon, June 1982

6月4日、空爆の初めから私たちは、PLOとPFLPの保安局と協議した。当初は彼らは、「これは予測していたことだ。空爆しながら南部からスール (ティールとも呼ばれるフェニキアの古い港町) に侵攻してくるだろうが、最後は結局南部のリタニ川以南を占領して対峙となるだろう」。とのことだった。そういう会

議をしている内に、イスラエルは宣闘布告もせず、破竹の勢いでベイルートダマスカス道路の分断を目指していたのである。

南部の闘いは、より混迷していた。私たちの仲間の日本人部隊は、南部のファタハの基地の中にあつた。リッダ闘争以来、イスラエルの空爆のターゲットとなることを避けて、「日本人」とは名乗っていない。ファタハの陣地には、バングラディシュなどアジア人ボランティアもかなり居たので都合が良かった。バングラディシュのイスラーム教徒たちは、出稼ぎで外国で働くよりもイスラームの大義に貢献できると、少しの給料で義勇兵としてファタハやPLOの指揮下で闘っていた。バングラディシュのアジア人だけではない。

パレスチナ解放の現場は、国際的な人種、信条を超えた様々な立場の人々の共存が成立する、唯一の戦場だったと言って良い。PLOとレバノン民族運動の統一指揮のもとに、パレスチナ各組織、レバノン人民兵組織、さらにそれらに自主的に連帯し参加する、アラブの解放組織や、クルドら少数民族や、アフリカの組織、イラン・ホメイニ派やフェダーイン・ハルク、ヨーロッパのトロツキストや、ラテンアメリカのマオイストや平和主義者、東欧の連帯組織など、各々が違った路線を持っていても各々が納得する方法と範囲で共同する。

平和主義者や非暴力主義の人は、社会活動一孤児院や学校、裁縫作業所などや、医療活動一をしながら、パレスチナの闘いを支援しているし、革命組織は銃を持って参加している。人々は支援を通して支援されながら、自分も世界も変革する事が一つの事のように実践しうる場である。そんな戦場は蹴散らされようとしていた。

こうした南部にいた者たちの話を、若干記しておきたい。6月4日、5日と激しい空爆が続いた。シリアパレスチナ側の対空砲火で、F16一機とスカイホーク一機が撃墜された。イスラエル側に墜落するF16の火と黒煙が弧を描いた。スカイホークはもっと手前に落ち、黒炎の横を落下傘が降りてくる。各部隊の責任者の持つトランシーバーは、レバノン南部にあるナバティーエ本部から「墜落した戦闘機のパイロットを逮捕せよ！」と指令を伝える。コマンドたちがトランシーバーで、パイロットの落下傘のおおよその落下地点を伝え合った。村人とPFLP部隊が二人のパイロットを捕獲した。しかし一人は地上に着いた時点で死んでいたし、村人が拘束したパイロットは、村人たちの怒号と一撃に怯えていて村人を止めるのに大わらわだったという。パイロットは、ナバティーエの病院で手当てを受けた後ベイルートへ移送された。

Nabatieh/Tyre

6月6日明け方4時頃砲撃がやみ、静かになった。5時頃国連安保理の緊急討議で停戦を求めるとい話が聞かれたが、イスラエルは従わない。すぐに激しい空爆が再開された。ファタハの基地なので、アラファト議長がサウジアラビアからダマスカスに戻り、ベイルート入りするという無線が入り、みな志気が高い。しかし本部からの無線が、イスラエルの戦車機甲部隊の侵略開始を告げた。絶叫する無線の声。「イスラエルが国連の監視所を突破、国連軍は交戦せず。スール近郊に敵は向かっている」。村人のレポがひっきりなしに、ナバティーエ前線本部に入る。



Litani River

「敵はアルヌーンで包囲戦を行っている。ナバティーエも戦場。スールに砲撃が落ち始めた」と無線が伝える。指揮官協議を行っているところで、イスラエルは「ガリラヤに平和を」作戦と始

めて侵略を認めた。ベイルート本部に情報は集中されていくのだが、全局がつかめていないようだ、と苛立ちの声。これまでの想定に基づいて、一旦リタニ川まで退いて対峙する方針らしく「退却せよ」の指令が入り、6日の夜から移動部隊の北上が始まった。前方を見て敵と対決している時は士気に溢れていても、背中を向けて急がねばならない時の心境は、精神的にもしんどいと後に仲間たちが語っていた。

敵の空爆で殺され負傷する者、イスラエル機の放つ照明弾が常時数個浮遊し、昼間のような明るさをぬって、味方も砲撃を中断なく続け援護しあって撤退を急いだ。6月7日朝方数名の負傷者を抱えつつ、移動部隊はベカー高原へと繋がる地点に退却。

敵がヘリコプターで降下部隊にコマンド服を着せて、パレスチナコマンドを装って攪乱作戦に出たために、あちこちで移動部隊が殺された。敵は味方のジープ装備を装い、移動部隊を敵の陣営へと誘導しているという。移動部隊のしんがりの方にいた私たちの仲間は、それでも集合地点に辿り着くことができた。ここでも事態はつかめない。BBCのニュースで、イスラエル軍はリタニ川を越えスールが包囲され、ナバティーエ、アルヌーンは陥落したという。海岸沿いのサイダ、ダムールも敵は侵略中というので思わず居合わせた者たちは「ムシ・マオール！（ありえないことだ）」と叫んだ。



Syrian Army column 1982 Lebanon War.

シリア軍は撤退命令が無く踏みとどまって闘っていたので、シリア軍と共同して対峙線を形成し、一歩も引かない闘いをしなければというのが、現場からの声だった。退却命令を批判し、シリア軍と共に闘おうとする者達も多い。ここで、シリア軍と共に闘わなければ、敵がさらに深く侵略してしまう。司令部の撤退命令に異議を唱え、戦場に残るべきだというやり取りが続いた。夜になってアラファト議長の名で、南部全軍に対して戦略的撤退方針が指令された。「ただ一人の犠牲者も出すことなく、速やかに迎撃しつつ撤退せよ」というものであった。「アラファト議長がベイルートに戻ったのだろう」と、ファタハではアラファトは信頼絶大である。夜、結局アラファト指令に基づいて撤退準備が始まった。

敵の第一方面隊は、海岸沿いの地域に戦車の北上部隊と海からの上陸部隊を、無制限に投入し空爆しながらサイダとベイルートを切断し、サイダの難民キャンプを包囲し、キャンプ内の戦闘部隊と対峙し激闘中だという。



General Saad Haddad, head of the Christian militia, hoisting the Lebanese flag at the Beaufort

Beaufort Castle Crusader /Battle of the Beaufort (1982)

敵の第二方面隊は、最も美しい遺跡ビューフォート城を、パレスチナ側の被占領地攻撃の拠点とみて空襲し、城もめっちゃくちゃに破壊しつつ、制圧したという。城に立てこもる味方軍は白兵戦を闘い、小部隊がイスラエル軍にゲリラ戦を展開中。イスラエルの第三方面隊は、マルジャヨーンの右派サード・ハダド軍陣地から出撃し、ベカー攻略の難しさでシリア軍の対峙でゆっくり進行中だという。シリア軍の防衛戦が崩れれば、イスラエルはベイルート、ダマスカス道路を制圧し、ベイルートは包囲される。シリア軍とイスラエル軍の激闘が、

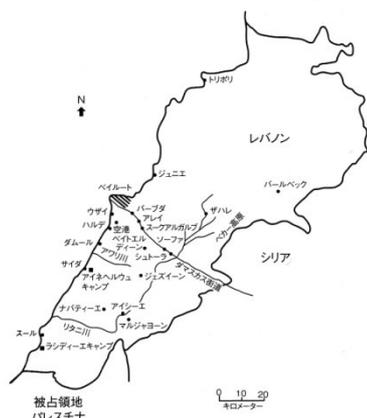
すでに8日から9日と拡大していった。撤退してきたPLAやファタハを含むパレスチナ勢力は、イスラエルとシリア軍の戦闘機と戦車戦にシリア軍を側面支援しつつ、ベイルート、ダマスカス道路の防衛戦に加わり闘い続けたという。以上のようなこうした私たちの仲間の小さな闘いも、経験の一つである。



Ein El Hilweh Palestinian Refugee Camp

より厳しかったのは、海岸沿いの南部のラシャデーヤ難民キャンプや、サイダのアインハルワ難民キャンプである。イスラエル軍に包囲爆撃されながら投降せず、キャンプ防衛隊は命を捧げて闘った。アインハルワでは、RPG対戦車砲をもってイスラエル戦車を撃退し、十代の少年たちは手榴弾を隠し持って、イスラエル戦車の中に投げ入れ犠牲を厭わない闘いを続けた。キャンプは破壊され、ついにはキャンプのモスクも砲撃に破壊された。その後もイスラエル占領の間、キャンプでは持久的なゲリラ戦の拠点として以降も闘い続けた。又アラファト指令を拒否した小グループもまた戦闘しつつ、2カ月近くイスラエル軍の背後を襲ったりして、攪乱戦闘を続けて、ベイルートに生還してくる者もいた。

6 包囲下のベイルート



Siege of Beirut

1982年6月13日、イスラエル軍は、ベイルート郊外にあるバアブダの大統領府を占領した。ダマスカスに通じる幹線道路がそばを走っているが、これも封鎖した。そしてPLO全勢力の、レバノンからの追放を求めた。これはレバノン政府への圧力であり、PLO勢力への物理的解体を求め、中断のない空爆砲撃が以降2カ月以上にわたって続くのである。クラスター爆弾、黄燐爆弾、バンカーバスターなどの残虐兵器が次々と使用され、6月乾期の雲ひとつない地中海沿岸気候の輝く美しいベイルートは、激しい爆撃で黒炎の暗い空の下となった。

国連の停戦を受け入れて、シリア軍は国境地帯に対峙した。一方ベイルート市内のシリア軍、パレスチナ勢力、レバノン国民抵抗戦線(PLOと共に内戦を闘ってきたドルーズの進歩社会主義党、共産党、シーア派アマル運動、スンニー派ナセリストラ)は共同でベイルート防衛体制をとり、イスラエル軍の西ベイルート突入に対抗して防御戦を闘った。イスラエル軍は、PLOが携行できず放置して撤退した膨大な武器を捕獲し、ベイルート郊外の高台にあるハルデから試射実験として、ベイルート市内に向けてその武器を撃ちまくった。



President Elias Sarkis, center, presides over the first meeting of the Salvation Committee to save Lebanon in 1982. Fouad Boutros is on his left (third from the right in the picture). Élias Sarkis

6月20日にはレバノンのサルキス大統領は、救国委員会を創設し、シーア派アマル運動のリーダーのナビーハ・ベリ、

ドルーズのリーダー、ワリード・ジョンブラットらも参加した。サルキス大統領は、米国の圧力下、PLOの降伏とシリア軍の撤退を求めると主張し、ベリとジョンブラットが反対した。しかし、激しいレバノン人の被害で、1日に2,000人を超える死傷者が出る日が続き、レバノン警察は1万人が死亡、負傷者は1.7万人に上ると6月15日に発表している。



George Shultz/United States Secretary of State

あまりの死傷者に米国政府も停戦に応じないイスラエルに不快感を示し始め、イスラエルのレバノン侵略を黙認したとして好戦的発言を繰り返すヘイグ国務長官を更迭し、ジョージ・シュルツを新たな国務長官とした。シュルツ国務長官は、フィリップ・ハビブを特使として派遣しPLO勢力のレバノンからの追放、シリア、イスラエル軍のレバノンからの撤退を目指すとした。6月下旬になるとアマルのベリもドルーズのリーダージョンブラットも、PLOの勢力は撤退に同意して降伏すべきだと言い出した。アラファトが激しい攻撃に抗し「我々はベイルートをスターリングラードにしても闘う」と発言したことで、レバノン国民抵抗戦線からは反発が広がったのである。

なぜ南部で闘わずにベイルートまで退却したのか、今になってスターリングラードとは何事か。「これはレバノンの領土であり、アラファトが采配するパレスチナではない」と批判し、ベリとジョンブラットは「PLOは時間稼ぎをやめ交渉によって退却せよ」と訴えた。

PLO勢力は、レバノン南部では村人やシリア軍を見放して逃げ、今になってベイルート市民を盾にするなど、友軍から退去を突きつけられた。アサド政権は、シリア軍との共同を反古にした、PLOの南部からの撤退をレバノン国民抵抗戦線と違って黙っていたが、批判的なのは目に見えていた。PLOは6月28日、条件付き撤退案を発表し、PLO勢力のレバノン東部ベカー高原への移動などを求めた。

PLOが新しい条件を訴えるたびにイスラエル側は降伏を迫り、前にも増して激しいイスラエル軍の殺戮作戦が続いた。そんな中ベイルート市内は誰もが団結して闘っていた。政治的駆け引きと違い、一蓮托生の条件に置かれた者たちは、パレスチナ勢力とともに対南対東、そしてイスラエルによる艦砲射撃と上陸作戦の西側の地中海沿岸で闘い続けた。難民キャンプは、どこも空爆砲撃に耐えながらの防衛戦である。私たちもまたそうした仲間たちと共にあった。レバノン住民委員会と共に南部からベイルートに逃れてくる避難民のために、水、住居、食料の確保なども膨大な仕事であった。加えて日本人たちの保護である。

海岸に沿った高級住宅地は、PLOリサーチセンターなどの施設もあり、艦砲射撃の直撃を受ける。その一帯に住む日本人たちに、安全な移動を促して回った。日本人ということで共同し、居合わせた特派員や商社員たちに要請されて、戦況や安全対策を伝え討議する定期会議をもった。彼ら日本人が民兵とトラブルになった場合には、私たちが身元を保証した。元気な組織は「イスラエル兵を捕虜にする」と戦闘意欲満々で、海岸沿いに夜イスラエル兵の待ち伏せ攻撃を行っている。



① Subhi al-Tufayli / Islamic Dawa Party in Lebanon ② Abbas al-Musawi/ Union of Muslim Ulama ③Hussein al-Musawi/Islamic Amal

この時期イスラエルに対する対応を巡ってアマルのナビーハ・ベリの方針に反対し、フセイン・ムサウィ師らがイスラエル軍と果敢に闘い続けた。南部からベイルートにかけて、パレスチナ勢力と共に侵略抵抗戦を続けた。そのためアマル指導部は、抵抗停止命令を発した。

しかし、「イスラエルとの停戦は反イスラーム的行為だ」としてムサウィ師はアマル指導部を批判し、ベカー高原中心に82年7月「9人委員会」を結成し分派した。(注8)これが「ヒズブッラー」(Hezbollah 神の党の意味)に発展していく。このベイルート包囲下、世界の進歩的人々はイスラエルの虐殺を非難し、パレスチナに連帯を次々と表明して、包囲下のパレスチナ、レバノンそして私たちを励ました。

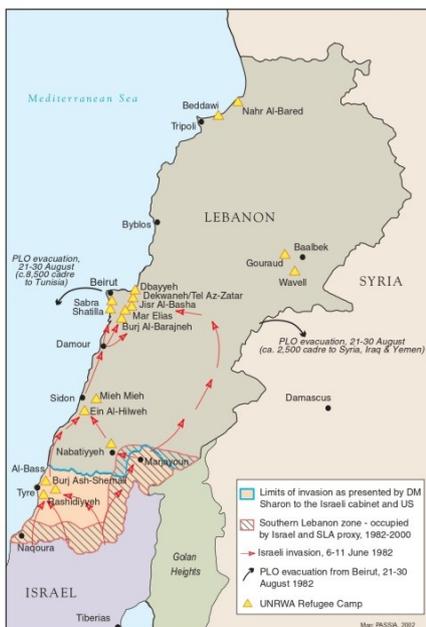
Italy national football team/1982 FIFA World Cup



ギリシアでは、イスラエルに抗議して、イスラエル行き船の積荷作業をストップさせた。イタリアでは、デモ抗議行動に加えて、ちょうど82年ワールドカップ中で優勝したイタリアチームが連帯として優勝トロフィーをパレスチナ人に捧げると宣言し、イタリアのPLO事務所に贈った。英仏独北欧でも、連帯のデモ、ストが続き、日本でもまた、欧米ほど大きくはないが、イスラエル、米国大使館への抗議デモが行われた。

死者2万人、負傷者3万人を越したといわれ、多くの戦友が砲撃や空爆の犠牲になった中、私達を含む日本人たちは、幸運にも生き延びた。

7 PLOベイルート撤退



7月下旬から8月に入って撤退に反対し、パレスチナ勢力のシリアへの退去を拒否していたシリアと折り合いがつかず、米国ハビブ特使の仲介で、海路脱出の話し合いが行われた。アラファトは米国政府特使との直接交渉によって、PLOの主導権を回復しようと試みた。それが又、アラファトPLO指導部の利用主義、他との戦略的同盟を裏切る行為と、レバノン、シリア友軍との溝を作った。シリアのアサド政権は、PLO撤退はシリア軍撤退を招き、レバノンがイスラエルの手に落ちるのは目に見えているので引かない。

ハビブ米国特使調停中も、イスラエル軍は8月4日一時停戦の抵抗戦を突破して、ベイルート市内に突入した。そしてレバノン首相の事務所、レバノン情報省、アンナハール新聞社、仏国営放送やUPI、AP通信社まで破壊した。9日国連安保理事会にソ連の提案したイスラエル非難決議は、米の拒否権で葬られた。

にもかかわらず、イスラエルのシャロンとベギンは、米国のハビブ案が面白くなかった。



August 23, 1982, the withdrawal of PLO fighters from Beirut.

PLOは撤退後、残る難民キャンプ人民に対する防衛と、安全を求めて多国籍軍導入を主張し、米仏はPLO撤退の監視の意図から、多国籍軍派遣に同意した。が、イスラエルとしては、バシール・ジャマイエルを大統領に仕立てて、平和条約を結ぶ魂胆であり多国籍軍駐留計画が気に入らず、8月12日には1日で4万発を超える大規模な集中的爆撃を開始し、交渉を中断させた。

激怒したレーガン大統領はエルサレムに電話し「メナヘム、こちらは随分我慢してきたと思っている。すぐに爆撃を中止しないと両国の関係は深刻な事態になる恐れがある」(注9)と圧力をかけた。



August 27, 1982. Palestinian soldiers celebrate as they head for the harbor of Beirut to embark for Cyprus.

アラファトの主張してきたPLO勢力のレバノンに留まる、ベカ一高原への移動の望みはなく、8月15日これまでの米国仲介を受け入れて、アラファト議長はレバノンからの撤退を決断した。レバノン左派勢力は、PLO撤退に反対し、パレスチナ左派勢力とともに、闘いを主張していた。アラファトの米国との直接交渉を求める努力にも拘らず、米国特使フィリップ・ハビブは、ワザン・レバノン首相を通してしかPLOと交渉しなかった。アラファトは撤退と引き換えに、国連決議242も認めて、米国との直接交渉を獲得することを目指していたが、それは叶わなかった。



映画「ベイルート 1982PLO 撤退からパレスチナ大虐殺まで」
(1982/19分/16mm) 布川プロダクション作品

空爆の包囲下のベイルートで、既に軍事的対決は破産しており、米国を相手に政治的活路を何としても見いだそうとするアラファトやアブ・ジハードら、ファタハリダーたちの願いは空爆下の激動の中で身近に見てきた。しかしソ連を戦略的友として、これまで共同してきた者たちにとって、それは「CD合意」への道だと、ファタハのアブ・イヤードさえも批判して語っていた。結局米国側の拒否で、その道は開かれなかった。8月18日、レバノン政府、イスラエル政府は、ハビブ特使のPLOベイルート撤退案を承認した。つまり、PLOがレバノン政府を通して同意を伝えたという事である。

空爆は止み、それでもあまりの空爆に空はまだ青空に戻らない。21日、伊仏軍が、25日には米国海兵隊が停戦監視軍として、ベイルートに上陸した。

自著「日本赤軍私史」にその時の事を書いている。(注10)

「8月21日からPLOの指揮下、パレスチナ勢力の撤退が始まった。怒りと悲しみのベイルートからの撤退は、しかし祭の場になる。闘うパレスチナ人のこうした神経には、日本人はいつも感心し、圧倒される。集合場所には、出発する人、送る人が押し寄せ、身動きがとれない。PLOのリーダーが演説するたびに感動し、カラシニコフとピストルを高々と掲げる。演説は続き、カラシニコフの一斉射撃の挨拶が続く。「イスラエルは孤立し、何も勝利を得なかった！パレスチナ人もパレ

スチナ革命も敵の破壊する企てを撃退し、ベイルートの中で強化され、世界の同情と連帯を得ている。パレスチナ革命は勝利した。イスラエルは敗北し、我々は勝利している」と叫ぶと、「パレスチナ革命は勝った！」波のように合唱し、泣き続けた。泣きながら連帯の銃声を連続的に放っている。祭のように踊り叫び、銃を空に向けて撃ち、闘いの決意を別れの財産としている。負けたのはイスラエルだとしみじみ思う。私たちがまた、撤退する日が来た。撤退合意のルールで、老人、子供、女性含め、全員軍服着用である。水筒とリュックサック、武器はピストルー丁を腹に、肩にカラシニコフ一丁、これがベイルートを去る十余年の荷物だ。集合場所は、すでに祭。別れあう家族、泣いているものが多い。9時半、PLOリーダーたちが演説を始めた。「我々は闘いから撤退するのではない！」一言発するうちから、シュプレヒコールが巻き起こり、カラシニコフが空に一斉に発射される。11時半にトラックに乗るよう指示された。見送りの人々は、ずっと撃ち続けている。12時出発の合図が降りた。

国連の建物の前から、ゆっくりとジープを先頭にして、トラックが後に続く。ゆっくりとマズラ通りを登り、海岸に沿って港への道を走り出した。海が綺麗だ。光っている。海側に沿って、撤退に反対していたレバノン左派民兵がびっしりと沿道に整列し、別れの挨拶の為に闘いの決意のために一斉に海に向かって撃ち始める。海岸沿いのシリア軍の対空砲火のための砲台も連帯の印として、ズドンと海に向かって撃ち始める。トラック満載の仲間たちも、レバノン左派の銃声に応じてドドドッと撃ちまくる。「撃つていい。これがこの闘いの最後の戦闘だ」指揮官が遅れてそれを了承する。レバノン軍の運転手は、人々の別れの時のために、さらにゆっくりとトラックを進ませる。あちこちから数え切れないカラシニコフの音が包む。砲が火を噴く。トラックの上では、あちこちから空薬莖がビシッビシッと体に飛んでくる。デマケーションラインに入ると、トラックがノロノロと進んだ。赤土の山をジグザグと進むと、空色の腕章をつけた白いヘルメットの国連軍兵士が完全武装で立っている。ここからは、国連軍の管轄に入る。棧橋の入口に来ると名前のチェックが行われる。振り返ると赤土の山、少し眼を上げると、ビルというビルから砲がこちらを見ている。こんなところで感傷はない。昼過ぎ、船は滑り出した。

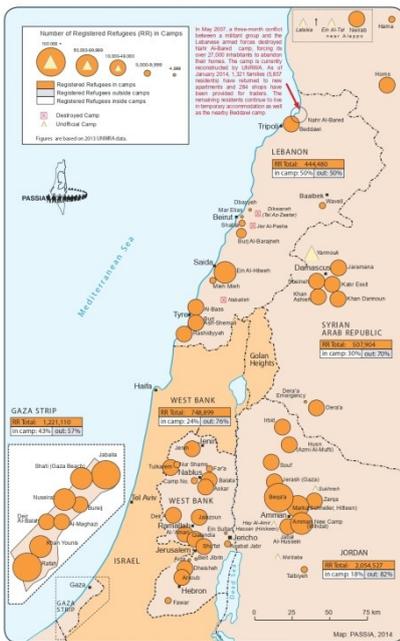


PLO ships leaving port of Beirut

こうしてPLO勢力およそ9,000人を船は、チュニス、イエメン、シリアなどの港へと運んだ。並行して、陸路シリアへと、シリア軍の一部やパレスチナ勢力2,500人がベイルートから撤退した。しかしどの組織もその後すぐシリア経由でベカー高原へと集結し、闘う態勢を整え、新しい陣地を形成し始める。8月30日、最後の撤退船に乗ったPLOアラファト議長は、シリアを避けた。アラファトの乗った船はギリシアに入港し、パソック政権・パパンドレオ首相の国賓待遇を受けたのち、チュニスへと向かった。このイスラエルのベイルート侵略、PLOの撤退はシリアとPLOアラファト指導部の戦略の違いと矛盾を公然と示したと言える。

8月末のレバノン警察の集計によると、1万7,000人以上が殺され、3万2,000人以上が負傷した。パレスチナ赤新月社はベイルートだけで、8月15日までに死者5,670余人、負傷者2万9,500余人、死者の84%近くが非戦闘員であったという。(注11)

8 サブラ・シャティーラ難民キャンプの虐殺

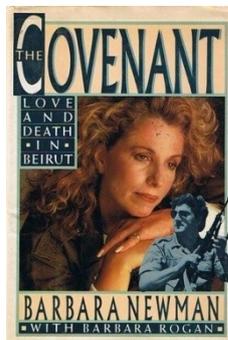
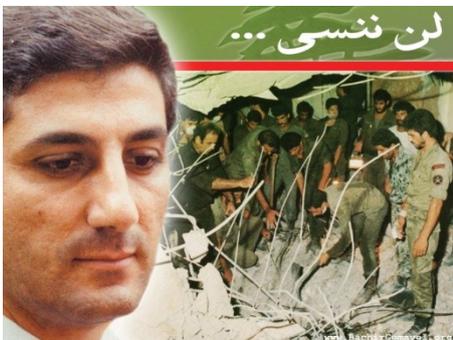


パレスチナ勢力の撤退が始まると、レバノン大統領選挙が予定通り8月23日に行われた。イスラエル軍支配、包囲下でバシール・ジャマイエルを大統領とするための、イスラエルによる工作が執拗に行われた。多くの代議員がイスラエル占領下の地域に居住していた為である。憲法では議員の3分の2の票決が必要である。イスラーム教徒も、マロン派議員も、イスラエル占領下の選挙を望まず、ボイコットを決めていた。しかしイスラエルは全議員の名簿を入手し、ジャマイエル支持者には支援し、対立候補がベイルートに行って投票するのを妨害するためには何でもやった。(注12)

こうしてジャマイエルが大統領に選出され、LFらは熱狂的に喜んだ。「イスラエルでも、その喜びに唱和した。モサド局員の団が、弾薬ケース丸ごとの銃弾を空に向けて撃ちまくり、彼らの忍耐がついに報われたことを喜んだ。」「エルサレムから、バ

シール・ジャマイエルに当選の祝電が届いた。『当選おめでとう。心からお喜び申し上げます。神と共にあれ、親愛なる友よ。レバノンの自由と独立のために、大いなる歴史的責務を果たされんことを。あなたの友、メナヘム・ベギンより』(注12)と。

「歴史的責務」とは、バシール・ジャマイエルに約束させたイスラエル、レバノンの平和条約の締結である。すでにバシールは、「レバノンからの外国軍の撤退」を主張してきたし、PLOの後には、シリア軍がターゲットである。9月1日夜、早速ベギンは、ジャマイエルをイスラエル北部の避暑地のナハリヤに呼んで、秘密会議を行った。ベギンとシャロンはレバノン、イスラエルの国交正常化と和平協定調印を即求めた。ジャマイエルは権力基盤を強化するまで時間が欲しい、不可侵条約ならいいと述べた。またイスラエル側は、シャロンからイスラエルの傀儡の SLA 司令官サード・ハダードをレバノン軍の参謀長につけるよう求めたが、ジャマイエルはハダードはレバノン軍の脱走兵であり、裁判にかけると答え、大喧嘩の怒鳴り合いになったという。「シャロンは、ジャマイエルに、イスラエルはレバノンの首根っこを押さえているのだ、お前が何をすべきか言う通りにしたほうが身のためだ。と念を押した」(注13)という。



Bachir Gemayel Assassination

両者はこの時には、何の合意も得られなかったらしい。のちにジャマイエルの死後、恋人だったと名乗り上げたCIAの米国女性が本を出版したが、その本の中でバシール・ジャマイエルはコードネームを持つCIAのレバノン要員であったと述べている。それが本当なら、イスラエルに対して強気

だったのもうなずける話であろう。しかし9月14日、選挙で大統領に選ばれたわずか3週間後、バシール・ジャマイエルは大統領就任式を前にして爆殺された。LFの入るファランへ党本部前に仕掛けられた巨大な車爆弾によってビルが爆破崩壊し、バシールと多くの側近が殺されてしまった。

この事実はベギンやシャロンの夢を吹き飛ばした。この事件は本性を剥き出しにしたシオニストの凶暴な姿を露わにさせていく。PLOアラファト議長は、PLO武装勢力の撤退にパレスチナ難民の防衛、保護を繰り返し念を押してきた。しかし、米仏伊の停戦監視軍は、イスラエルの意向を受け、PLO勢力がレバノンから撤収するのを監視しただけで、9月10日早々とその任を解除して、11日にベイルートから去ってしまっていた。

そのため停戦監視も、パレスチナ難民に対する保護もない。翌日、イスラエル軍は停戦協定を破って、西ベイルート突入をはかった。アメリカン大学や、かつてPLOが拠点とした地域を攻撃し、制圧を目指した。レバノン左派は、抵抗戦を闘ったが、15日には制圧された。イスラエル軍は家捜しし、テロリスト残党狩りと称してレバノン人を殺害しつつ、西ベイルート支配に乗り出した。

バシール暗殺によって、シャロンの夢は去りつつあった。怒りに燃えたシャロンは、「ベイルートの南にあるサブラ・シャティーラの難民キャンプに、テロリストが潜伏している」と言いキャンプを包囲させた。後の証言にあるように、イスラエル包囲に対して、シャティーラの住民たちは代表者を決め、白旗を掲げてイスラエル軍と交渉するために向かった。しかしその代表団の消息は誰も知らない。消されてしまったのだ。キャンプの中の「テロリスト」を「追い出すために」「国防軍の司令官はファランへ党民兵隊をキャンプに入れろ、と命令した」と(注14)言う。

Sabra and Shatila massacre



ファランへ党民兵レバニーズ・フォース(LF)はイスラエル軍と合流し、イスラエル軍が包囲していた、サブラ・シャティーラ難民キャンプに、「テロリスト狩り」の任務を与えられて16日夕方突入した。LF民兵らは自らの司令官バシール・ジャマイエルを何者かに殺された復讐に燃え、手当たり次第にキャンプのパレスチナ住民の殺戮を始めた。キャンプの外に逃げようとする住民たちをキャンプを包囲したイスラエル兵が許さず、追い返した。女、子供、老人ら含めて、銃、斧、ナイフで殺され続けた。男性は外に出され、並ばされ、その場で殺された。

サブラ・シャティーラ虐殺から20年後、「ガザに地下鉄が走る日」の著者、岡真理(京大教授)はベイルートに就き、当時虐殺された人々の家族から証言を得ている。壁の前に並ばされ、そしてその場で殺されたという集団虐殺が、キャンプのいあたるところで起きたと言う。

「男たちの遺体が狭い路地の壁の下に折り重なって倒れている写真が数多く残されている。(当時5歳の)ムハンマドさんの親族で犠牲になったのは男性たちだけではない。当時既に嫁いでいた姉は妊娠中のお腹を切り裂かれ、胎児もろとも殺されたという。インタビューのあいだ、ずっと

ムハンマドさんは私たちと目を合わそうとしなかった。受け答えも最小限だった。何か自分がの中に侵入してくるのを全身で拒絶しているように感じられた。」と岡真理は記している。(注15)

何十年も経て、当時5歳だったムハンマドの心は決して癒えない。この虐殺で目の前で愛する家族を殺された子供、何人ものムハンマドを生んだ。「パレスチナ人」というだけで、何の落度もない人々は、またも殺されたのだ。

当時私たちはベイルートから撤退し、海路シリアのタルトゥス港に上陸後、国境を越えて再び、レバノン領に入り、ベカー高原やパールベックに拠点を築き始めた頃である。イスラエル軍の支援のもと、LF民兵らへの虐殺は三日間にわたって、48時間以上続いた。シャロンはベイルートのイスラエル司令官から「友人達がキャンプに入った」という報告を受けて、「おめでとう。友人たちの作戦は正しい」と語ったという。

殺された人数は、パレスチナ赤新月社側の発表では2,000人以上だった。イスラエルの公式調査団「カハン委員会」の推定では、800人であったという。この衝撃的ニュースが世界に報道され、イスラエルでも建国以来の40万人以上の抗議の人々がテルアビブに集い、ベギン、シャロンら政権担当者の責任を追及した。こうした事態に慌てた米国政府は、9月24日、レバノン政府に通知して、米海兵隊を主軸とする米仏伊軍を再び多国籍平和維持軍として進駐させた。これに対して、レバノン国民抵抗戦線はドルーズやシーア派を中心に、イスラエル軍と多国籍軍の退去を求め、西ベイルート解放を訴えた。

すでにイスラエル軍の西ベイルート突入で、停戦は破られており、ベイルート山岳部や南部で内戦が再発した。山岳部のドルーズ地域では、イスラエル系アラブ人の中で唯一徴兵を受けているドルーズ兵たちがレバノンのドルーズたちと友好的になり、ドルーズを攻撃するLFらマロン派右派民兵に対決する、戦闘に加わってレバノンドルーズを助ける事件も起きていた。9月27日になってイスラエル軍は米軍と交代して西ベイルート市内から退いた。

Kahan Commission 1982/the Commission of Inquiry into the Events at the Refugee Camps in Beirut, イスラエルのカハン委員会は、83年に入って調査結果を公表し、エイタン参謀総長ら軍指導部、シャロン国防相、ベギン首相らの「間接責任」を認め、シャロンの国防相辞任を勧告し、シャロンは国防相は辞任させられたが、無人所相として、そのまま閣僚に居座った。ベギン首相は、事件を糾弾された時、「ゴイム(異教徒)がゴイムを殺しているのに、世の中はみなユダヤ人を犯人にして、縛り首にしようとしている」と不満を述べていた。(注15)

このサブラ・シャティーラ虐殺を「テロリスト狩り」と称して、指揮をとったのは、バシール・ジャマイエルの腹心、エリ・ホベイカである。彼は後に、反イスラエルに転じ、2002年、ベルギーの裁判所でサブラ・シャティーラ虐殺に関するイスラエルの関与の真相を証言すると公言したが、その後すぐ暗殺されてしまった。この「サブラ・シャティーラ、パレスチナ人虐殺」の衝撃は、世界を駆け巡った。虐殺の真相を明らかにするために、PLOと私たちやボランティアが共同し、「サブラ・シャティーラ国際委員会」を立ち上げた。ちょうど、レバノン・パレスチナ勢力がドルーズ地域を根拠地に、再び西ベイルート解放の闘いを始めていた頃である。PLOと共同し、PFLPも含め、サブラ・シャティーラの「国際民衆法廷」(IPTIL)を世界各地で企画し、北欧、インドなどでそれが始まった。

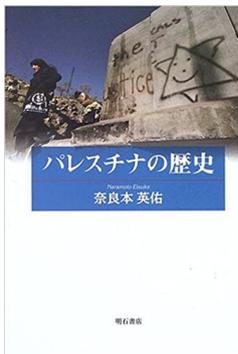
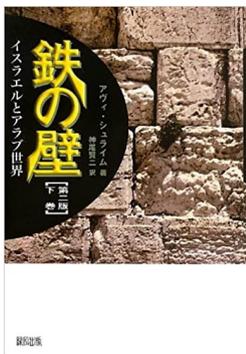


International Popular Tribunal on Israel's Invasion of Lebanon (IPTIL) in Japan 1983

日本でも1983年、国内の中東専門家、ジャーナリスト、連帯運動、社会党、労働組合らが中心になって、東京法廷が開催された。この東京法廷に、パレスチナ、レバノン、シリアなどから、目撃者、4

8年追放された帰還の権利を持つパレスチナ人たち、詩人、法律家などが訪日して、証言台に立った。そして建国以来のイスラエル、シオニストの蛮行、虐殺、追放、民族浄化の歴史を含めて生の声を証言した。それは当時の日本社会にも広く伝えられた。(2019年3月5日脱稿)

《注解》



①「鉄の壁」(下)69P

②「鉄の壁」(下)80P

③「パレスチナの歴史」272P

④「鉄の壁」(下)89P

⑤「鉄の壁」(下)89～90P

⑥「鉄の壁」(下)97P

⑦「ベイルート 1982年夏」

⑧「9人委員会」(Lajna al-Tis'a)は、1982年7月ベカー高原のイマーム・マフディー・ムンタザル・ハウザに9名が結集する事で組織された。シューラー会議を経て「9人文書」の一致で結成された。「そこに記された同委員会の目標は、イスラエルによる侵攻と占領に対する抵抗だけではなく、レバノンにおける統一された組織的なイスラーム運動の設立、シャリーア(イスラーム法)に基づいた社会運営、「法学者の統治(velayat-e faqih)」論の実践、そしてホメイニーへの忠誠であった。」(「抵抗と革命を結ぶもの(1)」末近浩太・立命館国際研究 22-2, October 2009)

イラン・ホメイニ革命を信奉する三つのグループ (1)レバノン・イスラーム・ダウワ党 (Islamic Dawa Party in Lebanon) / ムスリム学生のためのレバノン連合 (Lebanese Muslim Ulama Union) 代表ソブヒー・トウファイリ Subhi al-Tufayli (2)レバノン・ムスリム・ウラマー連合 (Union of Muslim Ulama) 代表アッバース・ムサウィ師 Abbas al-Musawi (3)イスラーム・アマル運動 (Islamic Amal) (代表フセイン・ムサウィ師 Hussein al-Musawi)

⑨「鉄の壁」(下)102P

- ⑩「日本赤軍私史」295～299P
- ⑪「パレスチナの歴史」277P
- ⑫「鉄の壁」(下)102～103P
- ⑬「鉄の壁」(下)104P
- ⑭「鉄の壁」(下)106P
- ⑮「ガザに地下鉄が走る日」(岡真理) みすず書房 2018 年 108P
- ⑯「鉄の壁」(下)106P



目次 <http://0a2b3c.sakura.ne.jp/sigenobu-pale-bz.pdf>



第 8 章 <http://0a2b3c.sakura.ne.jp/p-ls-8.pdf>